

高齢者がん診療指針策定に必要な基盤整備に関する研究

研究分担者 唐澤 久美子 東京女子医科大学医学部 放射線腫瘍学 教授

研究要旨:「高齢者がん患者の Q&A」における放射線療法に関わる記載項目と内容を検討し、日本放射線腫瘍学会の会員に呼びかけて分担執筆した。高齢者がん医療の研修会と公開討論会にて高齢者の放射線療法に関連する議論を深めた。

A. 研究目的

放射線療法は手術と同様に局所療法であり、効果と有害事象は原則的に照射した局所に現れる。現代の放射線療法は一般的に侵襲性が低く、手術や化学療法が難しい症例であっても施行可能なことがほとんどである。

高齢者がん医療における放射線療法の有用性を関係者との議論や文献的考察から明らかにし、「高齢者がん患者のQ&A」の執筆を通して、その有用性や限界を周知させ、診療指針策定に必要な基盤整備を行う。

B. 研究方法

研究分担者の唐澤より、日本放射線腫瘍学会および日本がんサポーターティブケア学会の学会員である者を中心として「高齢者がん患者のQ&A」の執筆者を依頼し、放射線療法の総論の記載項目と内容を検討、執筆を通して議論を行った。

高齢者がん医療の研修会と公開討論会にては、情報交換、議論を行ったが個人情報については配慮を行った。

C. 研究結果

高齢者がん医療の教科書では手術や化学療法については注意喚起の記載があるが、放射線療法についてはむしろ手術や化学療法が行えない高齢者に対する代替療法として取り上げられていることが多かった。

「高齢者がん患者のQ&A」の放射線療法の総論執筆と校正を終了し、パブリックコメントを募集している。

臓器、疾患毎に記載する各論においても放射線療法について記載している。

D. 考察

放射線腫瘍学を専門としない医療者や一般公衆の間では、近年の放射線療法の低侵襲性の理解が遅れており、誤解によって放射線療法の適用が低くなっている状況が推察された。

E. 結論

高齢者がん医療における放射線療法の役割がQ&Aの作成と議論を通して明確になりつつある。高齢化が進行するわが国において放射線療法の適用率が世界標準より低い状況は打開すべき問題であり、本研究を通して高齢者に対する放射線療法の有用性が周知されることを期待し、次年度以降さらに研究を推進する。

G. 研究発表

なし

2. 学会発表

平成30年の日本がんサポーターティブケア学会の学術大会において、「90歳以上の患者に対する放射線療法の有用性について」の発表を行った。

(第3回日本がんサポーターティブケア学会学術集会報文集、平成30年8月)

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得:なし
2. 実用新案登録:なし
3. その他:なし